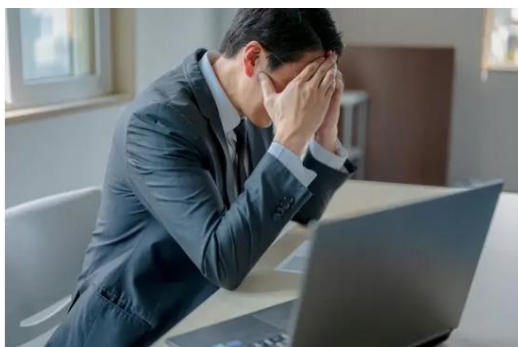


新型コロナで、認知機能が低下？ 想像以上に深刻な後遺症

2024年10月21日 谷口恭・谷口医院院長毎日新聞



10月から始まった新型コロナワクチン（以下、単に「コロナ」）の定期接種は65歳以上（と60～64歳の重症化リスク保有者）のみのため、59歳以下の人たとえ重症化リスクがあったとしても、「任意接種」となり高額な負担を強いられることとなります（当院の場合1万5400円）。今秋からは医療者でさえも定期接種にならず、希望するのであれば一般の人たちと同じ金額を負担しなければなりません。

「コロナワクチン未接種者が病院勤務してもいいのか」などという議論が激しく交わされた3年前の情勢とは大きく異なり、今ではワクチン未接種者をとがめる空気はまるでありません。では、任意接種希望者はほとんどいないのかといえばそういうわけでもなく、「コロナワクチンをうつべきでしょうか」という質問は頻繁に寄せられます。後遺症のリスクを懸念している人たちは少なくないのです。今回はそんな後遺症のなかでも最も避けたいもののひとつ「認知機能低下」を取り上げます。

世界各地から報告

コロナに罹患（りかん）すると認知症になりやすいという事象について、私自身はコロナが始まった2020年の後半くらいから感じていました。また、私以外にもそういったことを指摘する声は当時から世界中にあり、論文も発表されていました。

たとえば、イタリアの医療機関の外来に通う111人（平均82歳、男性32%）を対象とした研究では、調査期間中に31人がコロナに感染し、44人は認知機能が低下しました。コロナに感染したグループは、感染しなかったグループに比べ、認知機能が低下した人が3.5倍も多かったという結果が得られました。

コロナ感染と認知症の関連を調べた質の高い11の研究を総合的に解析した研究（メタアナリシス）もあります。コロナに感染した939,824人と、しなかった6,765,117人を比較し、コロナ感染により新たに認知症を発症するリスクが58%増加したとしています。

英国で成人10万人以上が参加したオンラインによる認知機能評価の分析によるとやはりコロナ感染で認知障害発症リスクが上昇していました。この研究では、「コロナが重症であると認知症リスクが上昇しやすい」という結果がでています。オンラインによる評価とはいえ、対象者が10万人以上ですからコロナ感染が認知症の発症リスクになるのは間違いなさそうです。

リスクは若者にも

コロナが高齢者の認知症のリスクになることは今では多くの臨床医が実感しています。医師のなかには「認知症を発症した原因はコロナではなく、過剰な外出制限で運動する機会や他人との交流が奪われたせいだ」という意見もあり、私自身もこの説はまんざら間違いではないと感じています。しかし、そういったことを差し引いても、やはりコロナに感染することが認知症のリスクになるという印象が私にはあります。



スマートフォンに書き込んだメモを頼りに、新型コロナの後遺症について症状や経過を説明する男性会社員＝大阪市で2023年1月10日、渡辺諒撮影

では若年者はどうでしょうか。実は50代はもちろん、20代ですらコロナ感染後に認知機能の低下を訴える事例は少なからずあります。ただし、そのレベルは認知症の診断に用いる検査（例えば「長谷川式認知症スケール」）で明らかな異常が出るほどのものではありません。また、脳のMRIを撮影しても所見があるわけでもなく、血液検査にも異常はでません。「以前のように仕事はかどらない」「聞いたはずのことを忘れている」というような訴えが多いのですが、検査では異常なく客観的な認知機能低下の証明はできません。このような症状で悩む人たちは、（特にコロナ後遺症に批判的な人たちから）「そんなの気のせいだ」「あなたはもともとそういうタイプだ」「精神病だから精神科に行け」などの心無い言葉でそしられることもあります。

しかし、海外では若年者にも認知障害が生ずるとする報告があります。例えば、22年4月に発表されたバングラデシュでの研究によると、コロナに感染した401人のうち19.2%に記憶障害が認められたといい、「年齢・性別・コロナの重症度と記憶障害の有無に関連はなかった」と結論付けています。

軽症でも影響が…

そして最近、衝撃的な研究が発表されました。医学誌 Lancet 2024 年 10 月号に掲載された「新型コロナウイルスのヒトチャレンジ試験における記憶と認知の変化 (Changes in memory and cognition during the SARS-CoV-2 human challenge study)」です。この研究では、過去にコロナに感染していない若くて健康なボランティア 34 人に、なんと人為的にコロナウイルスを曝露 (ばくろ) させています。「ウイルスに曝露した後最低 14 日間隔離され、およそ 1 年間の追跡調査に協力する」というのがボランティアの役割で、気になる報酬は 4,565 ポンド (約 90 万円) とのことです。

結果は非常に興味深いものです。34 人中、感染したのは 18 人で、1 人は無症状、残り 17 人は軽症でした。16 人は感染しませんでした。34 人は隔離期間中及び、30、90、180、270、360 日後に認知機能検査を受けました (調査期間は 21 年 3 月から 22 年 7 月)。その結果、感染したボランティアは、いずれの時点でも非感染ボランティアに比べ認知機能のスコアが低かったのです。ということは、コロナに感染すれば軽症であったとしても、少なくとも 1 年間は認知機能や記憶力が衰えることを意味します。

コロナに感染しても認知機能低下どころか、まったく何の後遺症もない人の方が多いわけですが、この研究でコロナに感染した若者も認知機能低下の自覚症状があるわけではないことに注意が必要です。自覚はないのだけれど、合計 11 種の認知機能を評価する検査の結果、客観的に認知機能の低下が認められたのです。

ワクチンがリスクを減らす？



新型コロナウイルスワクチンの定期接種を受ける男性 (左) = 東京都板橋区で 2024 年 10 月 1 日 午前 9 時 7 分、肥沼直寛撮影

では、「自覚のない認知機能の低下」はどのような問題を起こすのでしょうか。おそらく、学

生なら「テストの成績がふるわない」、社会人なら「凡ミスが増え、仕事のパフォーマンスが低下する」といった事態になるのではないのでしょうか。

このような事態は誰もが回避したいと考えるでしょう。ではワクチンによって自覚のない認知機能低下が予防できるのでしょうか。これを検証した研究は見当たりませんが、「ワクチンが後遺症全体のリスクを減らす」ことを示した研究はあります。24年7月に医学誌The New England Journal of Medicineに掲載された論文「デルタ株流行以前、デルタ株流行期、オミクロン株流行期における新型コロナウイルス感染の後遺症 (Postacute Sequelae of SARS-CoV-2 Infection in the Pre-Delta, Delta, and Omicron Eras)」です。デルタ株以前に比べ発症・予防効果が乏しいとされているオミクロン株の流行期でも、ワクチン接種者の後遺症の発生率は、未接種者の半分以下でした。

ここからは私見です。果たして認知機能低下を起こす病原体は新型コロナウイルスだけでしょうか。過去のコラム「コロナだけではない インフルエンザにも後遺症」で述べたようにインフルエンザでもそれなりの頻度で後遺症が生じます。別のコラム「新型コロナ 後遺症の正体は『慢性疲労症候群』か」で述べたように、いくつかの感染症は慢性疲労症候群を示唆する後遺症を残します。

ということは、「コロナに限らずいくつかの感染症では、発熱やせきなどの急性症状は完治しても、自覚できないほどの認知機能低下が起こることがあり、生活の質が損なわれている可能性がある」と考えるべきではないのでしょうか。

いずれにしてもコロナだけでなく感染症全般に対する予防が必要でしょう。ワクチンはベネフィットとリスクをしっかりと検討し、ワクチンの有無にかかわらず日ごろから感染予防に努めることが大切です。外出を控えすぎて認知症のリスクが上がるようなことがあれば本末転倒ですが……。